

2022年度

# 入学試験問題 (1期)

国語

2022年2月3日(木)

解答を始める前に次の注意事項を十分に読みなさい。

## 受験上の注意事項

1. 受験票と筆記用具以外は机上に置いてはいけません。
2. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
3. 不正行為と認められた場合には退席を命じることがあります。
4. 「開始」の合図で、問題用紙・解答用紙を点検し、解答用紙の受験番号・氏名欄に受験番号・氏名をはっきり記入しなさい。
5. 解答は、すべて解答用紙の解答欄に正しく記入しなさい。(解答用紙の余白には何も書いてはいけません。)
6. 問題に関する質問は不明瞭な文字等の確認以外は応じません。
7. 問題冊子の余白部分や白紙のページは、自由に使用してかまいません。
8. 試験終了時まで退席することはできません。試験終了の合図と同時に、監督者の指示にしたがって解答用紙を通路側に置いてください。
9. 身体具合が悪くなったときは、手を挙げて監督者に申し出てください。
10. 携帯電話を持っている人は電源を切ってください。これを時計として使用することはできません。
11. 問題冊子は持ち帰ってかまいません。

〔I〕 次の文章Aと文章Bに関する設問に答えたのち、文章Aと文章Bを関連づけて考察する設問に答えなさい。

文章A

明治の近代化のなかで、新しい学問と教育をめざす学校が次々とつくられていきました。

すぐに役立つ実学を教える学校が繁盛していくなかで、こともあろうかあまり役立ちそうにない哲学を教える学校ができました。私立哲学館<sup>※1</sup>です。井上円了<sup>いのうえたけりょう</sup>という哲学者が創立しました。円了先生、そこでなんと妖怪学の講義まではじめたのです。

明治二十年（一八八七）のことでした。その後、日本は近代化の流れのなかでいくたびもの国難を経験しました。いつしか妖怪など見向きもされなくなり、とてつろが戦争が終わり平和な社会が到来すると、妖怪はまたもや注目をあびるようになったのです。妖怪ブームの到来です。この現象はそれから延々とつづき、もはやブームとは呼べなくなりました。村おこし町おこしでも妖怪が引っぱりだこ。あげくは妖怪神社までできてしまう世のなかつです。今や妖怪たちも立派に市民権<sup>a</sup>を確立しました。鬼太郎<sup>きたろう</sup>と目玉オヤジ<sup>※2</sup>のフントウ<sup>i</sup>のたまものです。

哲学館において妖怪学の講義がはじまってから一世紀もの時間が流れました。妖怪をとりまく社会も学問のありようもさまざまに変化しています。②現代に即した新しい妖怪学を実現することは、はたして可能でしょうか。

わけのわからないものにひかれていく人間の心性に目を向けることが、妖怪学を学ぶ第一歩です。そのうえで、科学的な検証と明晰<sup>せき</sup>な論理によつてその本質を見きわめ、根拠のない思いこみや理不尽な偏見を打破していく。そうした批判精神を養うことを目標にしたいと思います。その先には理性に対する信頼があり、哲学の尊重があるのです。

まずは五感<sup>ii</sup>をソウドウイン<sup>きょうかく</sup>して驚愕<sup>きょうかく</sup>してください。私たちの想像をこえる現象が世のなかに満ちあふれていることに。そこから進んで、いったいどうやってそれに向きあい、乗りこえていくべきかを考えてみましょう。

哲学館における最初の科目表があります。明治二十年（一八八七）に配布されたものです。そこには哲学や倫理学とならんで「妖怪学」という科目がすでにあります。

なぜ妖怪学という科目があったのか。

人が妖怪といて恐れているものはじつは迷信にすぎない。そんな迷信に惑わされてはいけなない。迷信ばかりではない。思いこみや偏見にとらわれることなく、自分の目で確かめ、自分の頭で考えることが不可欠である。客観的な観察と主体的な思考にもとづい

て世界をみつめなければならぬ。実体のない恐怖におびえたりせず、確実に存在するものを信頼すること。つまりは妖怪を恐れぬことが、みずからものを考える営みとしての哲学のはじまりである。——これがそもそも出発点ではないかと思ひます。

では、なぜ哲学を学ぶことが大事なのか。あるいは哲学を持たねばならないのか。

円了先生の時代であれば、人々がみずからの哲学を持っていないからではないでしょうか。

誰もが昔からのしきたりどおりにするしかありませんでした。おかみに従うしかありませんでした。自由な意志を持って行動するなどということは、その時代には思いもよらなかったにちがいありません。

それならば現代に生きる私たちは、みずからの哲学を持っていると言えるでしょうか。私たちは吹けば飛ぶような権威のまえに屈してはいないでしょうか。たとえば、流行にふりまわされるなどというのは、そのなかに含まれるかもしれないのです。

井上円了は、明治維新の十年前、安政五年（一八五八）に越後国浦村（現在の新潟県長岡市浦）にある慈光寺で生まれました。

二十三歳で東京帝国大学に入学し、哲学を学びました。時代は文明開化のまったただななです。若い円了はとりわけ哲学のもつ合理的なものの考え方にひかれました。そして合理的な思考によって、身のまわりのことを解き明かしていこうとしたわけです。

身のまわりのことのなかには、その時代の人々にとっては妖怪のしわざにちがいないと考えられていたこと、つまりさまざま不思議な現象ももちろん含まれていました。

円了先生の妖怪研究のねらいは、したがって迷信の打破でした。妖怪の存在を否定するために妖怪を研究したのです。そのようなかたちで、明治近代化における啓蒙思想家としての役割を果たそうとしたのでした。

大学在学中に哲学会を設立した円了先生は、さらに卒業の翌年の明治十九年（一八八六）、不思議研究会を設立します。その最初の取り組みは、当時ちまたで流行していた「こつくりさん」の実体解明でした。その後、円了先生は雑誌広告を使って不思議な現象にかかわる情報のシュウシュウにつとめます。膨大な古籍籍のなかから妖怪に関する記事を抜き出す一方、全国各地を歩いて聞き書きをこころみしました。その調査研究の成果をまとめて、明治二十六年（一八九三）に『妖怪学講義』第一冊を公刊します。

円了先生は妖怪について次のように定義しています。

「洋の東西を論ぜず、世のココンを問わず、宇宙物心の諸象中、普通の道理をもつて解釈すべからざるものあり。これを妖怪といひ、あるいは不思議とシヨウウす」

つまり道理で解釈できない不思議な現象、すなわち妖怪ということになります。道理というのは、正しい論理のことです。それは合理的な思考によって導き出されるものです。

さて、合理的な思考にもとづいて正しい論理の世界に到達するということが、これはまさしく哲学が目標としているところに他なりません。ということは、哲学はじつに妖怪の正反対に位置するもの。逆に言えば、哲学の対極にあるものが不合理な思考であり、不思議な現象であり、すなわち円了先生が言うところの「妖怪」ということになります。ヌリカベや一反木綿<sup>※5</sup>だけが妖怪というわけはありません。

(菊地章太『妖怪学講義』より)

\*作問の都合上、一部表記を改めた所がある。

※1 哲学館…現在の東洋大学。

※2 鬼太郎と目玉オヤジ…水木しげる作の妖怪漫画「ゲゲゲの鬼太郎」に出てくる主人公とその父親。

※3 東京帝国大学…現在の東京大学。

※4 こつくりさん…西洋のテーブル・ターニングに起源を持つ占いの一種。

※5 ヌリカベや一反木綿…「ゲゲゲの鬼太郎」に登場する妖怪。

〔設問〕

問1 波線部 i のカタカナを漢字に直しなさい。

i フントウ      ii ソウドウイン      iii シュウシュウ      iv ココン      v ショウ

問2 二重傍線部 a の語句のここでの意味として、最も近いものをそれぞれ一つずつ選びなさい。

a 市民権を確立する

ア 人間らしく生きていくこと      イ 行動・思想・財産が守られること

ウ 世に広く一般化すること      エ すべての人に共通すること

b 吹けば飛ぶような

ア 頼りない様子      イ 変化のない様子      ウ 軽薄な様子      エ 柔軟に変化する様子

c 啓蒙思想

- ア 日本古来の視点を重要視する思想  
イ 社会の風潮に忠実に従うように主張する思想  
ウ 個人の意義を確立し、尊重する思想  
エ 理性による思考の普遍性を主張する思想

問3 傍線部①「妖怪学の講義まではじめたのです」とありますが、円丁先生が妖怪学の講義を始めた理由を「哲学」という語を必ず用いて七十字以内で説明しなさい（句読点を含む）。

- 問4 傍線部②「現代に即した新しい妖怪学」とありますが、筆者の掲げる妖怪学の目標として適切でないものを一つ選びなさい。  
ア 科学的な検証と明晰な論理によって本質を見きわめる。  
イ 哲学を尊重し、自身の理性を疑ってかかる態度を育成する。  
ウ わけのわからないものに魅了される人間の心性に目を向ける。  
エ 思いこみや偏見を打破し、批判していくような精神を養う。

問5 傍線部③「その時代」とあるが、どのような時代か。二十五字以内で説明しなさい（句読点を含む）。

文章B

私たちの身の回りから「闇」がなくなりだしたのは、いつのころからだろうか。地域によって違いがあるのは当然であるが、文学者の鋭い感性で「闇」の喪失の危機を感じ取った谷崎潤一郎が、『陰翳礼讃』<sup>6</sup>という文章のなかで「私は、われ／＼が既に失いつゝある陰翳の世界を、せめて文学の領域へでも呼び返してみたい。文学という殿堂の檐を深くし、壁を暗くし、見え過ぎるものを闇に押し込め、無用の室内装飾を剥ぎ取ってみたい。それも軒並みとは云わない、一軒ぐらいそう云う家があってもよからう。まあどう云う工合になるか、試しに電灯を消してみることだ」と書いたのが、昭和の初めのことであった。もうこのころには、闇の喪失が目立ったものになってきていたのである。その文章のなかで、谷崎は妖怪の出現しそうな室内の陰翳のある闇について、こう書き記している。

現代の人は久しく電灯の明りに馴れて、こう云う闇のあったことを忘れてるのである。分けても屋内の「眼に見える闇」は、何かチラチラとかげろ<sup>※7</sup>うものがあるような気がして、幻覚を起し易いので、或る場合には屋外の闇よりも凄味がある。魍魎とか妖怪変化とかの跳躍するのはけだしこう云う闇であろうが、その中に深い帳を垂れ、屏風や襖を幾重にも囲って住んでいた女と云うのも、やはりその魍魎の眷属ではなかったか。闇は定めしその女達を十重二十重に取り巻いて、襟や、袖口や、裾の合わせ目や、至るところの空隙を填めていたであろう。いや、事に依ると、逆に彼女達の体から、その歯を染めた口の中や黒髪の中から、土蜘蛛の吐く蜘蛛のいと<sup>※10</sup>の如く吐き出されていたのかも知れない。

谷崎が嘆いているのは、「眼に見える闇」の喪失であつて、「眼が効かない漆黒の闇」の喪失ではない。燭台や行灯の明かりとそ<sup>①</sup>の明かりの陰にできる闇とがほどよく調和したところに日本文化の美しさを見いだし、明る過ぎる電灯によつてそうした陰翳のある世界が消失しようとしていることを憂い悲しんでいるのである。すなわち、明かりのない闇も好ましくはないが、闇のない白日のような過度の明るさも好ましいことではなく、光りと闇の織りなす陰翳ある状態こそ理想だというわけである。

谷崎はそこに日本の美の理想的姿を見いだした。しかし、陰翳の作用の重要性はその配合調和の度合いに多少の違いはあるにせよ、美のみではなく、日本人の精神や日本文化全体、さらにいえば人間全体にとつても重要なことだといつていいのではなからうか。

谷崎の文章からもわかるように、光りと闇の、ときには対立し相克し、ときには調和するという関係が崩れ、急速に闇の領域が私たち日本人の前から消滅していったのは、電線が全国に張りめぐらされていった大正から昭和にかけての時代であつた。この時代に大正デモクラシーという名のもとに、近代化の波が庶民のあいだにも押し寄せ、その一方で、人々は資本主義・近代的消費社会のシステムのなかへ編入されていったのである。銀座にネオンが輝き、『東京行進曲』<sup>※11</sup>が明るい大都会の明るいイメージをアピールし始めたころである。そのころから高度成長期にかけて、戦争という緩慢期はあつたものの、闇の領域が人々の身边から消え、それとともに多くの妖怪たちの姿も消え去つてしまつたのである。

大正時代に流行つた童謡に西条八十の『かなりや』がある。「唄を忘れた金糸雀は、後の山に捨てましよか、いえいえ、それはなりませぬ」というフレーズのこの歌を、私たち現代人もときどき思い出し口ずさむことがある。この歌の「かなりや」が海の向こうからやつてきた西洋の文明を象徴しているとすれば、「後の山」は人間の完全な管理下に置かれた山でなく、それ以前の「闇」の領域としての恐怖に満ちた山であつた。この「後の山」は自分の家のすぐ裏手の山であつたかもしれないし、小盆地宇宙モデル<sup>※12</sup>でいう周囲の山であつたかもしれない。あるいは近くの森や林や野原だつたかもしれない。いずれであつたにせよ、この「後の山」

は前近代が抱えもつていた深い闇の恐怖空間であつた。こうした「後ろの山」や「背戸」<sup>※13</sup>という言葉で表現される空間が、当時の子どもたちにとって、さらには大人たちにとつても謎めいた闇の空間としてまだしつかり生きていたのである。児童文学者の村瀬学は、『子ども体験』という本のなかで、次のように説いている。

子どもたちの直面する空間には、常に「向う側」「背後」があつて、それがよくわからないと不安になるのである。仏壇や納戸<sup>⑬</sup>の恐さは、その暗さが特有の「向う側」を隠しもっている感じがするからである。

しかし、これは子どもたちだけではなく、大人たちにとつても同様であつた。「かなりや」のような明るさと暗さが漂う大正童謡が流行つた理由の一つは、それが子どもたちに向けての歌であると装いつつ、じつは大人たちの心情に訴えかけるように仕組まれていたからである。それゆえ大人たちの心を揺さぶり支持されたのである。

(小松和彦『妖怪学新考 妖怪からみる日本人の心』より)

※6 『陰翳礼讃』…谷崎潤一郎による随筆。昭和八年から翌年にかけて発表された。

※7 かげろう…姿が見えたり消えたりするという意味の動詞。

※8 魍魎…山林に出るといふ妖怪。

※9 眷属…身内・配下の者。

※10 土蜘蛛…くもの姿をした妖怪。

※11 『東京行進曲』…昭和四年に公開された同名の映画の主題歌。

※12 小盆地宇宙…盆地の底に町があり、周囲が農村や丘陵に囲まれている空間のこと。

※13 背戸…裏口。また、裏門。

〔設問〕

問6 波線部㉔㉕の漢字の読み仮名をひらがなで書きなさい。

- ㉔ 裝飾      ㉕ 跳躍      ㉖ 効      ㉗ 裏手      ㉘ 納戸

問7 傍線部④「『闇』の喪失の危機」とあるが、どのような意味において「危機」であるのか。最も適切なものを選びなさい。

ア 昭和の初め頃には、地域によって差はあるものの、日本中に電気が供給されはじめ、室内の明度が格段に上がっていったという意味。

イ 近代以降の日本には西洋文化が流入し、日本古来から生活に根付いていた妖怪が文化として消失してしまうかもしれないという意味。

ウ 光と闇が織りなす陰翳のある様子こそ日本の美の理想の姿であるが、電灯の明かりによって陰翳が消えようとしているという意味。

エ 屋内の闇は時として人々に幻覚のようなものを見せてしまう場合があるので、あらゆる地域に早急に電気の普及が必要だという意味。

問8 傍線部⑤「じつは大人たちの心情に訴えかけるように仕組まれていた」とあるが、「大人たちの心情に訴えかける」ことができたのはなぜか。その理由として最も適切なものを選びなさい。

ア 「後ろの山」や「背戸」といった背後を意識させるフレーズを歌詞に盛り込むことで世代を問わず誰にでも恐怖感を与えられたから。

イ 銀座のネオンのように明るい大都会の夜のイメージを喚起してしまうことへの反発として、大人への戒めを込めた歌も多かったから。

ウ 大正の童謡に歌われている、前近代が抱えていた深い闇の空間は、謎めいた闇の恐怖空間としてまだ生きていて大人達にも影響したから。

エ 「かなりや」のような明るさと暗さを同時に内包するような難しい童謡は、そもそも子ども向けに作られていなかったから。



問9

**文章A**における井上円了の説明と**文章B**における谷崎潤一郎の説明として最も適切なものを選びなさい。

ア 井上円了は妖怪のようなわけのわからないものにひかれる人間の心性に着目し、批判精神を養おうとした。一方で、谷崎潤一郎は資本主義・近代的消費社会システムの中で妖怪が消えることを憂いた。

イ 井上円了は流行にふりまわされる傾向は妖怪を恐れる心性と同じであると推論した。一方で、谷崎潤一郎は妖怪の存在を感じるような光と闇の織りなす日本的な空間の消滅を嘆いた。

ウ 井上円了は普通の道理をもって解釈することのできない不思議な現象を合理的に研究した。一方で、谷崎潤一郎は「眼に見える闇」と「向う側」は共通して恐怖の対象となると述べた。

エ 井上円了の妖怪研究のねらいは正しい論理に基づいた合理的思考による迷信の打破にあった。一方で、谷崎潤一郎は妖怪の存在を感じるような闇のある空間を日本文化における「美」と捉えた。

問10

**文章A**と**文章B**から言えることとして最も適切なものを選びなさい。

ア 明治から昭和にかけて日本古来の風景が近代化のあおりを受ける中で失われた。その後、戦争の混乱期を経て平和な時代になると妖怪ブームが訪れ、妖怪神社ができるなど、妖怪は神格化され新しい妖怪が生み出され始めた。

イ 明治から昭和にかけて日本古来の風景が変容を迫られた。近代化を慌てた先に戦争という悲惨な経験を得たが、敗戦という事実が妖怪復権を助長して、妖怪は神格化され信仰の対象にまでなった。このような時代の潮流で妖怪は現代にまで生き続けている。

ウ 大正から昭和にかけての近代化により合理的な思考が求められていくようになったことで、対極にある妖怪や「闇」が消えていったが、戦後の平和な社会で妖怪などの不思議な存在が再び注目されたので、それらにどのように向きあうかを考える必要がある。

エ 明治を起点として近代化の流れの中で身の回りから闇が失われていった。実学を教える学校が隆盛していく中で、実学とは言えない妖怪学の講義を始めた哲学館の功績もあり、妖怪ブームが訪れて、現在では妖怪が日本の社会になじんでいる。

〔II〕 以下の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

もしも<sup>①</sup>それを知りたいと、ほんとうに希<sup>ねが</sup>うのなら、まず、その言葉をこそ、きっぱりと捨ててしまふべきなのだ。

そう、「哲学」というあの言葉、そしてあれら哲学概論、哲学入門、哲学とは何か、哲学に何ができるか、哲学はこれでわかる、蘇<sup>よみがえ</sup>れ哲学！ 等々——。私たちのまわりでは、何と多くの哲学が語られようとしていることか、【 A 】、それらがどれほど哲学のほんとうを語り得ているか。「哲学」という言葉を一切用いることなく、哲学を語ることができるとでなければ、それは哲学ではない。この試みの全体は、この基本的な確信に基づくものだ。

それなら哲学はどこにあるか。教壇になく、教科書注釈書になく、敢<sup>あ</sup>えていうなら先哲たちの著作のなかにさえ、それを開く鍵穴の深く匿<sup>かく</sup>されて、私たちが知りたいと希<sup>ねが</sup>う哲学はどこにあるか。——哲学は、いまここにある。哲学という言葉など知りもしない私たちが、この人生に直<sup>ちか</sup>に対面しているところにある。いつも初<sup>はじ</sup>めてこの世に目覚め出たような驚きと当惑のあるところならどこにでも必ず、哲学は発生している。この試みは、私たちのところが共有するそうした無<sup>む</sup>垢<sup>く</sup>の感受性への、絶<sup>ぜつ</sup>対<sup>たい</sup>的<sup>てき</sup>な信<sup>しん</sup>頼<sup>らい</sup>に依<sup>よ</sup>るものだ。そして、ともにそこへ立ち還<sup>かえ</sup>ることを、いざなうものだ。

【 B 】 哲学は人生論か、学問ではないのか、と人は言うだろう。哲学は決して人生論ではない、しかし学問であると言い切ってしまうには、きわめて厄介微妙な領域が、私たちには残される。たとえば、先哲たちの著作を一から淀<sup>よど</sup>みなく復唱<sup>ふくしょう</sup>できる学者がいたとして、平生は学内政治その他に余念がないとして、私たちは彼を哲学者だと言うか。あるいは、いわゆる在野を名のるとしても、他人の考えひとつ許すこともできずに互いに責め合っている光景は、哲学の本来とどのような位置関係にあるのか。ぼんやりと想<sup>おも</sup>い巡<sup>めぐ</sup>らしていた子供が、「ぼくも、死ぬの？」とぼつりと問うとき、そこにこそ私たちは哲学の発生を正当にも認めるのだ。

【 C 】 私たちは、哲学とは何かと問う前に、誰を哲学者と呼ぶのか、どのようなところを哲学的と言うのか、と問うべきなのだ。

数学の在り方を学問の模範とするなら、<sup>④</sup>哲学は、学問でもあり得るといふ言い方が正確だ。個的に感受された或る想い、「考え」の原形のようなものが、言葉という肉体をこの世に得て、彼以外の者もそこに参加でき、さらにそれらを継承、推進できる公共性を持ち得たその限りにおいて、だ。が、学問としての哲学に参加している人、【 D 】 哲学的な人であるというわけではない。そこには画然とした一線が、常にある。

小林秀雄が、かく見事にそれを言い切った。

（人は種々な真実を発見することは出来るが、発見した真実をすべて ⑤ ことは出来ない、或る人の大脳皮質には種々な真

実が観念として棲息するであろうが、彼の全身を血球と共に循る真実は唯一つあるのみだ。～（「様々なる意匠」）

哲学史に残る偉大な哲学者たちとは、彼らの全身を血球と共に循る一真実を所有した人々のことだ。あらゆる最上芸術家が身をも

って制作するように、あらゆる最上哲学者は全人生賭けて思考する、「人生とは何か」。したがってそれは人生論ではない、【 E 】

それは、論じる余地などあり得なかつた彼という人生の宿命だからだ。そして何よりも、ここで忘れないでほしい、彼らは、やむ

に ⑥ 「これは何か」と問い始めたのであり、決して「哲学とは何か」という問いから始めたのではなかつたということ。

彼らの座右に哲学辞典は置かれてなかつたということ。かくして生じた言わば事件を、「哲学」の名で呼ぶべきかどうかなど、問

い始めてしまった本人にとつては全くどうでもいいことではないか、そうではないか。

はつきりと言つてしまおう、「これは何か」という世にも奇てれつな問いを、それでも問わずにはいられないあれら「哲人」とは、

つまり「変人」である。そう、私たちが普段、あの人は何かが普通の人と肌合ひが違ふと感じる、あの「変人」である。学問を積ん

で人は変人になるわけではない、変人とは言わば生まれつきである。それは、詩人という人がそうであるのと全く同じことなのだ。

人生によつて人生を問う、あるいは有限によつて無限を問う、根本的に不可能な試みだからこそ逆に、種々な哲学説の並存が可能

なのだ。だから、自然科学が進歩するといわれる意味では、哲学は大して進歩しない。平たく言えば、いつの世にもこの世にはいろ

いろな考えの人が居るものだという、あの常識へと還つてくる。が、哲学もまた学問としては、自然科学の進歩を中軸に、互いの学

説の不備を補い合ひつつ螺旋を描き、少しずつ上昇していると見えなくはない、ゴールの側から眺めてみれば、だ。哲学のゴールと

は、現代哲学の最前線、世紀末思想その他のことでは決してない。それは、他でもない、「考え」のあの消失点、私たちには何ひと

つ「わからない」ということが、豁然と「わかる」、あの地点のことだ。最先端の物理学は、自ら見出してしまったものの奇怪さに

困惑し、そも宇宙とは何だったのかという基本の問いに回帰することで、ますます哲学に接近しつつある。が、問うたところで相手

は無限、しよせん無理、それで人は、有限なるこの人生をこれまで生きてきたように、何事もなかつたかのように、やはり生きてゆ

くことになるのである。哲学という問いの振り出しが常識なら、あがりもまた、常識なのだ。なのに、問うても詮ないそれら ⑧ を、

懲りずに問ひ続ける ⑨ なる人々、それがあの、変人としての哲人たちの一群である。

（池田晶子『考える人——口伝西洋哲学史』より）

\*作問の都合上、一部表記を改めた所がある。

※1 小林秀雄…日本の文芸評論家、編集者、作家。一九〇二〜一九八三。

※2 豁然…迷いや疑いがふと消えること。

〔設問〕

問1 空欄【 A 】【〜】 E 【】に補うのに最も適切な語を一つずつ選びなさい。なお、それぞれに異なる語が入る。

ア では イ なぜなら ウ そして エ つまり オ 必ずしも

問2 傍線部①「それ」が指す内容として最も適切なものを選びなさい。

ア 言葉 イ 哲学 ウ 人生 エ 確信

問3 傍線部②「人生に直に直面している」と、傍線部③「初めてこの世に目覚め出たような驚きと当惑」の二つの内容を合わせて一言で表した言葉を本文中から六字で探して、そのまま書き抜きなさい。

問4 傍線部④「哲学は、学問でもあり得る」と言うためには、哲学はどのような状態であるべきか。比喻を使わずに五十字以内で説明しなさい(句読点を含む)。

問5 空欄【 ⑤】に補うのに最も適切な言葉を選びなさい。

ア 応用する イ 継承する ウ 選択する エ 所有する

問6 空欄【 ⑥】に入る言葉をひらがな四字で答えなさい。

問7 傍線部⑦「哲学のゴール」はどこか。「〜地点。」につながるように、三十字以内で答えなさい。

問 8

空欄

⑧

⑨

⑧

と

⑨

は反対語である。

⑧

には本文中にある

⑧

には本文中にある

⑧





国語(1期) 模範解答

[I]

問1 i 奮闘 ii 総動員 iii 収集 iv 古今 v 称(す) (2点×5=10点)

問2 aウ bア cエ (2点×3=6点)

問3 迷信や思い込み、偏見にとらわれず、客観的な観察と主体的な思考にもとづいて世界を見つめ、みずからものを考える営みとしての哲学を教えるため。 (10点)

問4 イ (3点)

問5 文明開化のまっただ中で、日本が近代化していく時代。 (4点)

問6 ㊸ そうしよく ㊹ ちようやく ㊺ き(かない) ㊻ うらて ㊼ なんと  
(2点×5=10点)

問7 ウ (3点)

問8 ウ (3点)

問9 エ (3点)

問10 ウ (3点)

[II]

問1 Aウ Bア Cエ Dオ Eイ (3点×5=15点)

問2 イ (3点)

問3 無垢の感受性 (3点)

問4 考えの原形が言葉として表現され、他者の意見を考慮しつつ、継承し、推進できる公共性をもっている状態。 (10点)

問5 エ (3点)

問6 やまれず (3点)

問7 私たちには何ひとつ「わからない」とはっきり「わかる」(地点) (5点)

問8 ⑧常識 ⑨非常識 (完答) (3点)